

聞き取り調査

モルさん日記

東京都 岩田 博

ついこの間まで対ソ連に備えて北朝鮮の山中に完全軍装で展開していた我が部隊は、終戦の噂と共に撤収命令を受け、すぐすぐこの街威興に帰って来た。部隊は空虚となった街の女学校の教室に各中隊別に分駐した。「日本は負けたのだ」「いや、一時戦争を止めただけなのだ」、目標を見失った兵隊達はつれづれを議論に花を咲かせる他はなかった。

武器弾薬は既に返納し、軍馬は今しがたソ連兵の監視下、街の広場に繋いで来たばかりだ。ただ、組織だ

けは元の軍隊そのものであった。

教室の二階から外を眺めると、そこは高く積まれた機密と思われる兵用書類を焼却する黒煙の匂いが真夏の太陽にしつこく漂っていた。

この情景から見れば、確かに日本は負けたに違いない。玉音放送も直接聞いたわけでもなく、つんぼ機敷に置かれた兵隊達は体で雰囲気を感じ信ずるより他はなかった。ただひたすらに上からの指示により行動するしか、すべはなかったのである。

小隊長滝沢見習士官は、終戦前の戦闘態勢に展開する直前、海辺の街西湖津の小学校校舎に分宿していた頃に我が中隊に配属されて来たばかりである。

ある日、週当番として巡察の折、同じ学校の校舎の一画にいた部隊経理部の整頓が悪いということで、装

具をヒックリ返したという事件があった。中隊の幹部は紛糾した。「そんな事をしたら我が歩兵砲中隊は経理から睨まれ、反動で給与が悪くなってしまうではないか……」古参下士官の三富曹長が真っ先に文句を言い出した。乙幹上がり杉山見習士官その他もこれに同調した。この事があってから敗戦後の今も、よそ者滝沢見習士官はことごとく中隊幹部から背を向けられていたのである。

飯の配給は敗戦と同時に半減した。上の者には盛りが多く、下の兵隊には少なくという悪習慣はいまだに残っていた。皆平等で、始末に困った分だけ上の者にのせれば良いという滝沢見習士官の言い分も、中隊内部の空気は気に入らない風潮であった。「軍隊はメンコの数（軍隊で過ごした年数）で価値があるんだ」大声で言い放った永島曹長等、敗戦を境として軍内部の風紀が音を立てて崩れてゆく姿を垣間見た気がした。恐らくあの事件以来のギクシヤクが露骨にいつまでも糸を引いていたのだろう。

モル二等兵は、私達北支での初年兵教育の期間中、

いつも内務班で自分の目の前に並んでいた（その実名は森二等兵である）。何故かその態度応答はギョチナく、常に集中的にビンタを浴びせられ、私は可愛相だなと思っていた。いつも何だか雨漏りがしているようなので、私は心の中で「漏るさん」と名づけて同年兵としての愛称を付けたのである。

威興の学校の二階の教室の奥には部隊長の部屋でもあったのか？ 軍隊では、上官がそばを通った時、発見した者はすかさず「敬礼」と怒鳴るのが鉄則になっている。その日も敗戦から間近い暑い日であった。お馴染みの白い甚平姿の部隊長が廊下を通って部屋に行くところであった。モル二等兵は廊下に面した窓際で、いやでも部隊長とまともに顔を合わす位置にあってに違いない。しかし、いつものようにボーッとしていて部隊長のお通りにも気づかず、「敬礼」の声も発しなかったようである。そばで見えていた奥田兵長は、やにわに平手のビンタをくらわしたのである。しかも部隊長の面前で……。部隊長は日頃の温和な人柄にも似ず、烈火のように怒り「かねてから私的制裁はいか

んと言っているではないか。直ちに中隊長を呼べ。」
中隊長秋山中尉がキツくお灸をすえられたことは、想像に難くない。

モルさんが殴られたその二、三日後、部隊長は軍人としての敗戦観からか、壮烈割腹自殺された。また、中隊長は将校集団となる事で中隊から離れて行った。問題の滝沢見習士官も我々の周りからいつしか姿を見せなくなった（あるいは中隊長と共に将校団に加わったか？ それは覚えがない）。終戦の悲劇は束となって我々の身边に降りかかって来たのである。

幾度も編成替えてモルさんがどうなったか、再び会うことはなかった。まさか兵隊達がその後ソ連に連れて行かれるとは誰も思わなかったし、シベリアに行っても同じ運命を辿ったと思われるモルさんが、この厳冬を生き抜いて行けるだろうか？と、私は思っていた。

その後、抑留の地でたまたま渡された飯盒の胴体にふと「森」の名前を発見した時、咄嗟に「これはモルさんの飯盒だ！」と思った。モルさんは心配していた

通り死んだか？ あるいはこれは他の森さんかも知れない。でも私はモルさんの物だと信じていたい。

我が同年兵モルさんが遠い異国の凍土の下深く眠ってしまっていたことは、その後復員してから何年か過ぎて見つけた抑留死亡者名簿で紛れもなくわかった事実であった。

痛恨

神奈川県 田口幸安

予期せぬ不運のシベリア連行、いつ帰国出来るか目処がつかない絶望のドン底生活に入る。強制労働に服する五カ年計画の酷使である。

雨後の増水の急流を下半身裸で臍上まで浸って川幅約十五メートル、必死の渡河断行にバランスを崩し、足をさらわれそうになり、危うく流されるところであった。二人は足をさらわれ、流れ行く後を追い探索